
彼女とアールグレイティー

ふらっぺ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女とアールグレイティー

【Nコード】

N4788Y

【作者名】

ふらっぺ

【あらすじ】

私立星城学園高等学校一年の、俺、高原雅人は、ひょんなことから、「メアリ」ら、旧校舎5階の第二図書室の住人達と、彼らの周りで起こる不思議な事件を解決することになるが・・・（月に1〜2回、不定期更新になります）

プロローグ

俺に仕事を押しつけた張本人、岡島龍太は今頃、サッカー部で女子達に黄色い声をかけられながら青春の汗を流しているのだろう、と俺、高原雅人はばやいてみた。

一方、俺はと言うと、この永遠に続くであろうかとも思われる長い長い吹きさらしの非常階段を、先々週から吹き始めた木枯らしと、上履きから伝わってくる鉄板の冷気に耐えながら、えっちらおっちら上っていくのであった。

ことの起こりは一週間前、岡島に借りを作ったときから始まる。

その時、俺は自動販売機の前で途方にくれていた。あろう事か、五百円玉を自動販売機の下に落としてしまったのだ。財布の中にはまだ少し金が入っていたのだが、貧乏性がたたってか、なんとかそれを取ろうと腕を伸ばしてみたのだが、あと少しが届かないその時同じクラスだがあまり話したことがなかったそいつに助けられた、というわけだ。残念ながら岡島のほうが拳一つ分背が高く、余裕で手が届いたのだ。それから少し話をする程度にはなったのだが、いくら俺が帰宅部だからといって、こんな量の本を持たして、その上、非常階段しか通行手段がない旧校舎の五階にまで行かせるといふのはいささか図々しいとも思うが、まあ借りなので仕方がない。

・・・と言うことを思い出していたらいつの間にか五階まで着いていた。

しかし、見たところ、持つて行くのを頼まれた本は、新着本から、もう古くなつた誰も読まなそうな本までいっしょくたにしてあるが、いったいこれをどうするのであるのか。しかも、旧校舎の第二図書室に行く生徒なんて聞いたことがない。

非常階段から続く廊下に入ると、寒さより先に、甘いにおいが気になった。そういえば、幼なじみでクラスの風紀委員の日野聡美が、一部の女子達が校則違反なのに、屋上などの見つけにくいところでお菓子を食べていて困っている、などと言っていたっけ……

だが、そういう、市販で、学校にこっそり持ってきて隠れて食べる、みたいな、砂糖がたっぷり使ってあって安っぽいにおいじゃなくて、どこことなく高級感があり、なおかつ手作り独特のやさしく甘いにおいのような気もするが、なぜそんなにおいがこの誰もこなさそうな寒い旧校舎の、それも五階からするのだろうか。不思議にも思っただが、やはり寒いので先を急ぐことにした。

この私立星城学園高等学校は、日本でも五本の指に入る、伝統のある大学の系列校だ。なかでもこの高校はだいぶ初期に建てられたらしく、最近工事が終わった新校舎に機能のすべては移されたものの、旧校舎はまだ取り壊されてはいない。なので旧校舎は木造のところも多く、今まさに俺が歩いている五階の廊下も、すきま風の多い寒いエリアなのだ。

目的の第二図書室に着いた。たしか、行けば司書の先生に会えるのではなかったっけ……と思いながら、これまた木造のドアを開ける。

そこは、すきま風が吹く旧校舎特有の寒々とした殺風景な教室ではなかった。

まず入ってすぐに目に付くのが、しっかりとしたカウンター、古めかしいが、しっかりと手入れがされている図書室特有の大きな机が4つと、それとセットであろう木製の椅子が各机に5〜6脚おいであつた。そして少々浮いて見えたのが、控えめだが上品さが伺える装飾が施されているミニテーブル、そしてなぜか、その上に食べ

かけのアップルパイと、これまた飲みかけの紅茶、そして読みかけとおぼしき文庫本が一冊。そしてなにより、ここは寒くない。上を見ると、暖房が弱めに入っているようだった。岡島の話だと、ここは閉架書庫として使われているのではなかったのか……。いや、それはともかく、司書の先生を見つければ。

「すいませーん、図書委員です、本を届けにきました……」

・・・反応がない。もしか誰もいないのでは・・・と耳を澄ませてみたら、二、三分ごとに、ぱら・・・ぱら・・・となにかのページをめくる小さな音がした。聞こえてないのか、とその音のするところまで行ってみることにした。

それにしてもすごい本の量だ。二列に配置されている本棚の数は、軽く二十を超えていた。そういえば、たしか、この学校の初代校長が大変な読書家で、死後、彼のコレクションをすべてこの学校に寄付した、と聞いたことがある……

そこに、彼女はいた。

くるくるとカールさせたブロンドの髪。憂いを帯びた、寂しげで、すべてを悟ったような青い瞳。折れてしまいそうな、ほっそりとした手足。入り口にあったミニテーブルとセットであろう、これまた上品な椅子に座っていることもあって、まるで、精巧に作られた人形のようなだった。ただひとつ、人形と違うところは、彼女のそのほっそりとした指で、本のページをめくっているところであった。

俺は、言葉が出なかった。

窓の外では雪が降り始めていた。そういえば朝、今日は天気予報でこの冬一番の寒さで、このあたりでは珍しく雪が降るかもしれない

い、と言っていたな、とぼんやり思っていた。

俺が窓の外を見た気配で気づいたのだろう、彼女は目を落としていた本から顔を上げた。そして、こう言ったのであった。まるで、すべてを知っていて、そして知らない俺に対して呆れているみたい。

「きみは、だれだい？」

そして、今思えば、俺が必然やら神やらを信じるようになったのも、この瞬間からかもしれない。

「わたしは、”メアリ”。」

T
o
B
e
C
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.

プロローグ（後書き）

この話は、まだプロローグなので、次話から事件やら推理やらが始まります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4788y/>

彼女とアールグレイティー

2011年11月17日18時37分発行